様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月　８日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１５２０６６３
研究課題名（和文）　近世天草・寒天生産地域の社会構造に関する研究

研究課題名（英文）　The Production of Japanese Agar and Gelatin in Edo Period

研究代表者
後藤　雅知（GOTO　MASATOSHI）
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：50302518

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世日本における天草・寒天の生産構造について、天草生産地である伊豆、寒天加工地域である大坂北部地域を取り上げて検討したものである。伊豆における天草の購入は浦請という漁場利用方法で独占され、またそこに紀州藩が介入することで、原料となる天草の価格が上昇した。天草価格の高騰は寒天生産人仲間の経営を圧迫し、また各藩が寒天の専売制を強化したため、生産地村々の間での対立や村内百姓間の相克などを生じさせることとなった。

研究成果の概要（英文）：I took up Izu area and northern Osaka area at the agar and gelatin production place, and this study examined production structure of agar and gelatin in Tokugawa Era. The purchase of the agar in Izu was monopolized by fishing ground usage called urauke, and raw materials and a price of the agar that it was rose because Kishu feudal clan intervened there. Because the remarkable rise of the agar price suppresses the management of the agar production person companion, and each feudal clan strengthened a monopoly system of the agar again, the opposition between the villages of the straight production center and the conflict between the farmers in the village occurred.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：日本近世史・漁業社会史

１．研究開始当初の背景

(1)私自身も参加した身分的周縁研究会では、近世身分制社会の全体構造をいかに分析するか検討を深めてきたが、その一つの方法として、ある特定のモノに注目して、その生産・流通などに関与する人びとあるいは集団のありようから、全体社会の構造を明らかにしようとする手法が用いられつつある。

　また「地域生活レベル」のありようそれ自体が絶対的な価値を持つ分析対象となりうるとされ、各地に固有な地域社会の構造を具体的に明らかにすることが、近年の地域社会

構造論として重視されるようになった。
(2)こうした動向を受けて、私は、干鮑というモノを題材に、房総の海付村落で鮑が生産・集荷され、それが長崎を通じて輸出される過程、あるいは鮑の集荷権が領主への運上金上納の対価として請け負われるありようを検討した。本研究の題材である天草についても同様の構造があると推定されるので、天草・寒天生産の全体像を具体的に明らかにするため、伊豆や紀州藩領内での天草生産、および摂津・丹波国における寒天の生産・流通構造を地域に即して明らかにし、改めてそれらを総合化しようと考えた。

２．研究の目的

(1)本研究の目的は、近世後期を対象として、天草という原料が寒天に加工され、販売・輸出される過程を分析することで、そこに関わる人びとや集団のありようを総合的に明らかにし、天草というモノに即した地域社会の構造を近世の列島社会の中に位置づけることである。
(2)近世の天草の生産は、質量ともに伊豆・紀伊半島が突出していたと考えられる。また寒天を加工したのは摂津・丹波の寒天製作人に限られ、その販売・流通の担い手も大坂の寒天問屋に限定されていた。しかし近世後期には、紀州藩や宇和島藩など、領内で天草を生産する大名家が、寒天の製作・販売を専売化しようと目論んだ結果、各地域の天草生産・集荷のありようや寒天の加工過程に、大きな影響を与えたと推定される。本研究は、こうした地域社会の構造、つながりとその変容を、具体的に明らかにしてゆくものである。

３．研究の方法

(1)本研究は、研究対象を天草というモノに絞っているため、天草生産および寒天生産が盛んであった特定の地域に残された史料を博捜的に収集し、それらから全体像を復元することが基本である。ここでは３つの分析軸を考えた。
(2)分析方法の１つは、寒天製作人の具体相を、摂津国内と丹波国内の２つの製作人集団にそくして明らかにすることである。これらは幕末期に、一体となって寒天の一大生産地を支えるので、そうした集団化の過程としても、これらを分析することができる。
(3)もう１つは、原料生産地として最大規模を誇った伊豆での生産構造の分析である。現地に残された史料から、幕末期に天草値段が高騰する過程で、その集荷・販売をめぐって村と生産漁民、集荷請負人との間に相克が生じた過程を、寒天生産構造の変容と関連させて明らかにすることができよう。
(4)最後の１つは、紀州藩・宇和島藩領内の天草生産やその大坂での販売に関する局面である。それぞれの領内での天草生産・集荷は、藩専売制の拘束を受けており、また大坂寒天問屋への出荷は大坂にある各藩の蔵屋敷を通じたルートに限定されたと考えられる。

４．研究成果

本研究では寒天販売における藩専売の具体相はほとんどふれられなかったが、天草生産地である東伊豆と寒天製作地である北摂・丹波北部地域のありようについては、寒天生産を基軸にしながら、それぞれの社会構造を分析できた。こうして天草・寒天というモノを通した列島社会の連接構造を明らかにできた点は大きな成果といえよう。その個々の点については、以下に記す。
(1)伊豆の生産地について。稲取村の天草に関しては国立歴史民俗博物館所蔵の絵巻に生産過程が記されるが、この絵巻に描かれた、沼津藩役人が天草を回収した会所などの場所が比定でき、天草生産の具体像がかなり明らかになってきた。海岸にほど近い場所に会所施設や請負制下で利用された建物を維持し、専売制を展開したことがわかった。
(2) 西伊豆戸田村の名主であった勝呂家文書を収集、解読したことで次のようなことがわかった。日本近世において、全国的な寒天生産における原料供給地として、天草の最大の水揚げ量を誇ったのは、稲取を中心とした東伊豆地域である。そこでは浦請という方式で天草の独占的購入権が設定されており、近世後期には、その浦請の請負金額が上昇したため、原材料である天草の代金が高騰し、大阪寒天問屋や北摂・丹波寒天製作人仲間の経営を圧迫したこと、またこれに伴い、大阪寒天問屋らは請負人に対して天草代金の引き下げを要求し不買運動を起こしたこと、しかし幕末期には寒天製作地が大坂北部のみならず信州にまで広がるなどしたため、請負人はこうした新たな天草の販路を求めて、大坂寒天問屋による不買運動に対抗したこと、などが、原料生産地側からの視角で明らかとなった。
(3)北摂地域や丹波地域の寒天製作人については、以下のことがわかった。紀州藩の寒天製作を最初に一手に引き受けた牧村の黒田家は、現在の兵庫県にある多田院の御家人（多田郷士）を名乗る家柄であり、村内の名主を務める家柄とは異なったこと、こうした背景が有栖川宮との関係創出につながった可能性があること。木代村で経済的な発展を遂げたと推定される宇津呂一族に属する三左衛門家は、紀州藩から寒天製作の依頼を受けて株立された丹波寒天仲間の一員であったが、嘉永期に起こった村方騒動で本家が糾弾を受ける過程で、寒天製作の中止が求められたこと、また寒天製作では、村内の川縁で天草晒しが行われ、また天草の煮汁が田畑に流れ出すなど、村方百姓との紛争を惹起する要素があったことが明らかとなった。

(4) 牧村や木代村、寺田村、切畑村など、寒天製作を行った村の実態も明らかとなった。こうした村々は、冬期には外気温が氷点下にまでなる、寒天製作に適した山間村落であり、山畑といった等級の土地が多かった。北摂地域においても、丹波地域においても、寒天製作地では薪炭生産なども同時に盛んで、寒天釜での煮沸に必要な薪炭が隣接地域で供給可能であったこと、しかし寒天製作は原料の確保や寒天仲間としての株や製作道具、またそれらを用意する資金などを必要とし、広大な製作場所が不可欠であったため、村内の他の百姓との軋轢を生んだこと、さらに当該地域の村落は村内が小集落ごとにわかれ、なおかつ多田郷士などの多様な特権を有する階層が散在したため、各村落内での寒天製作人と百姓との対立関係は複雑化する傾向にあったこと、などが明らかとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 後藤雅知、近世後期百姓持山における炭生産の構造、査読無、歴史科学と教育、28･29合併号、2012、37-54
② 後藤雅知、近世福山藩領における保命酒生産と鞆町の社会、比較日本学教育研究センター研究年報、査読無、６巻、2010、21-30
③ 後藤雅知、千葉県史編纂の経緯と現在の課題、飯田市歴史研究所年報別冊・地域史の現在、査読無、１巻、2010、74-82

〔学会発表〕（計４件）
① 後藤雅知、近世上総養老川舟運と岩槻藩、円座近世都市における流通・運輸と身分的周縁、2011/1/10、大阪歴史博物館
② 後藤雅知、近世の請負制と海･山の利用、大阪歴史科学協議会例会、2009/12/12、大阪市中央青年センター
③ 後藤雅知、近世福山藩領における保命酒生産と鞆町の社会、第 11 回国際日本学シンポジウム、2009/7/4、お茶の水女子大学
④ 後藤雅知、近世中後期岩槻藩房総分領における薪炭請負と養老川水運、近世大坂研究会例会、2009/6/20、大阪市立大学

〔図書〕（計１件）
後藤雅知・吉田伸之共編、山川出版社、山里の社会史、2010、321 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
後藤　雅知（GOTO MASATOSHI）
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：50302518